

経済マンスリー

[原油]

原油市場を取り巻く環境（3月）

1. 原油価格の推移

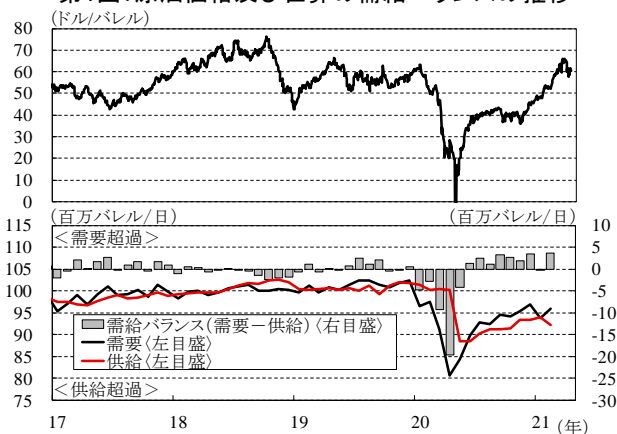
原油価格(WTI期近物1バレル当たり)は、2月中旬に米国テキサス州中心に発生した寒波による石油精製施設の操業停止と暖房用の需要増という需給両面の要因を受けて、同月下旬には63ドル台まで上昇した。その後、持ち高調整もあって50ドル台後半まで下落したが、3月4日にOPECプラス閣僚級会合にて主要国の協調減産やサウジアラビアの自主的な追加減産の維持が発表されたことで一時66ドル台まで上昇した。しかし、足元は価格上昇の過熱感を受け、持ち高調整の売りが入り60ドル付近を推移している（第1図・上）。

2. 需給の動向

今月公表されたEIA月報によると、2月の原油需要量は日量9,589万バレル、供給量は同9,217万バレルと、コロナ禍以降では最大、近年としても記録的な需要超過となった（第1図・下）。寒波を受けた米国の需給変動と、OPECプラスの協調減産およびサウジアラビアの自主的な減産が主因で、主として供給サイドの要因といえる。

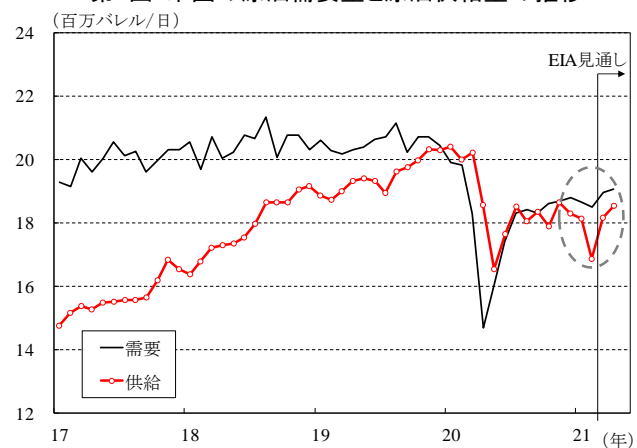
米国では、2月の原油供給量が前月比▲129万バレル(日量)と寒波により大きく減少した一方で、需要は暖房用中心に底堅く、大幅な需要超過となった。2月中旬から3月初旬にかけては、この寒波による需給逼迫が価格上昇の主な要因となったが、足元天候は戻っており、原油生産・精製体制は復旧しつつあるため、米国の原油需給は概ね寒波前の状態に正常化していこう(第2図)。また、OPECプラスによる減産の動向にも注視が必要だ。2月の協調減産の遵守率は112%と計画以上に絞られているが、これにはサウジアラビアの自主的な追加減産分(上記遵守率のうち13%ポイント分に相当)が含まれている。同国エネルギー相は自主的な追加減産の終了を急いでいない旨発言したと報じられているが、自主的な減産をいつまでも所与と見做し続けることは難しいとみられる。足元、欧州での感染再拡大等もあって価格は頭打ち気味であり、先行き更に調整色を強める展開も想定されよう。

第1図：原油価格及び世界の需給バランスの推移



(資料)EIA(米エネルギー省エネルギー情報局)資料、Bloombergより
三菱UFJ銀行経済調査室作成

第2図：米国の原油需要量と原油供給量の推移



(資料)EIA資料より三菱UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 布施 直樹 naoki_fuse@mufg.jp
鷹巣 里奈 rina_takasu@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。